

忘れ得ぬ東京大空襲

伝えたい 戦後80年
過去から未来

記憶を語り継ぐ

昭和19年5月、私は赤紙召集により、東京の防空に当たる高射砲隊「東部1993部隊」に入隊しました。

入隊して3日間は五年兵がいろいろと親切にしてくれましたが、4日目から厳しい初年兵教育が始まりました。特に戦陣訓

（陸軍の将兵心得）の暗記が大変で、覚えの悪い者はしよつちゅう殴られ夜は夜で点呼整列、往復ビンタが毎晩のように続きました。

そのうち1期の検閲が終わると我々は各班に配属となり、同期入隊約200人のうち190人ほどが南方派遣と称し、輸送船で次々と送られていきました。

11月に入る頃から、B29の本土偵察が頻繁になりました。我々の高射砲は高度5000以下に限界で、口惜しいかな、高度1万以上のB29をただ見るだけの毎日でした。



自身が経験した東京大空襲を振り返った和田正美さん

諏訪市四賀

和田正美さん 102

昭和20年を迎え、B29の飛来がいよいよ激しくなってきました。しかし、敵機は何の危害を加えることもなく、ただ飛び去るのを見詰める不気味な日々が続きました。そして、忘れることのできないあの日がやってきました。

3月9日夜8時30分ごろ、東京に一斉空襲警報が発令。築地の陣地にいた我々はすぐに戦闘配置につきましたが、敵機が来る気配はなく、しばらくして警報は解除されました。兵舎に戻り、眠りにつくと突然大きな音が。

慌てて飛び起きると、外は空襲警報が鳴り響き、空を見ると無数のB29。焼夷弾が雨のこたく落とされ、その光で一面曇屋のように明るくなっていました。

この時高度1500以下の超低空飛行をする敵機に対し、我々は射撃しましたが高射砲が

B29から焼夷弾の雨 一面火の海